

1. はじめに

英語の *in, on, up* などの空間表現は、名詞補部を伴う前置詞としても、補部を欠く不変化詞 (*particle*) としても機能し、句動詞 (*Verb-Particle Construction: VPC*) の中核を成す。Aarts (2007) はこの現象を範疇間の「段階性 (*gradience*)」として体系的に記述した。また VPC は *haul in the lines/haul the lines in* (「ロープ [綱] を引き入れる」) のような語順交替を示し、語順の違いにより結果・完遂解釈の強弱が現れることがある (Bolinger 1977)。

本発表は、前置詞・不変化詞の両用性を、語彙項目の曖昧さではなく、範疇情報を欠く同一語根が異なる機能範疇と併合されることから生じる付随現象として捉え直すことを提案する。さらに、VPC の語順交替は、事象構造と空間構造に関わる 2 つの異なる統語位置に独立して External Merge (EM) された同一語根の *occurrence* のうち、PF においてどちらのコピーを音形化するかという選択の帰結として説明できることを示す。

2. 不変化詞の二重の構造的要求と主要部移動分析の問題

本発表は、Ground を補部に、Figure を指定部を取る split-P 構造 (Svenonius 2003) を仮定し、不変化詞を「Ground 補部を欠いた P」と捉える。また、Svenonius (2010) に従い前置詞領域の機能的階層 (PathP > PlaceP) を取り入れ、そのうち空間的・アスペクトのスケールの導入を担う下位領域を lower P と総称する。事象構造については、Ramchand (2008) の first-phase syntax (*initP*・*procP*・*resP* の三層) を仮定し、*res* 主要部の補部に *pP* が収まるものとする。

このとき、結果・完遂解釈を伴う VPC の不変化詞は、二重の構造的要求を負う。すなわち、不変化詞は経路・スケールの基点として lower P の位置に存在しなければならない (要求 A)、同時に事象の結果性を担う *res* の位置にも関与しなければならない (要求 B)。Ramchand (2008: 132) の分析は、本発表の観点から見れば、この二重の要求を不変化詞の lower P から *res* への主要部移動によって満たすものと理解することができる。

しかし、主要部移動分析には少なくとも次の問題がある。第一に、主要部移動を PF 操作とみなせば、*narrow syntax* の段階で *res* の位置に統語的実体が存在しないことになり、結果性の付与と Spec-*resP* における Resultee の認可が保証されない。第二に、これを *narrow syntax* の操作とみなせば、IM が新たな述語関係を構築することになり、「EM のみが θ 関係を構築する」とする Duality of Semantics (Chomsky 2021; Chomsky et al. 2023) と緊張する。第三に、語根を文法素性も意味内容も持たない抽象的インデックスとみなす立場 (Panagiotidis 2020) では、語根の解釈はそれが実現される局所的な構造環境に依存するため、単一の移動連鎖の内部で、lower P に固有の空間的スケールと *res* に固有の結果性という、各位置に局所的な二つの意味的寄与を、対応づけたまま維持することが難しい。したがって、不変化詞が lower P と *res* の両方に関与するという洞察は維持しつつも、その実現を主要部移動ではなく別の仕方で行う必要がある。

3. 提案: External Merge + Form Copy

本発表は、主要部移動に代えて、同一 *root identity* の複数回の External Merge (EM) と、PF における Form Copy (FC; Chomsky 2021; Chomsky et al. 2023) による分析を提案する。De Belder & van Craenenbroeck (2015) に従えば、一項操作としての Merge の最初の適用 (Primary Merge) は必ず空集合 $\emptyset$ との結合を含み、すべての派生は最深部に *featureless* な構造的スロット ($\emptyset$ 位置) を持つ。この立場では、語根は語彙的特性をあらかじめ備えた要素ではなく、この構造的位置に挿入される要素として捉えられる (*structural account*)。この枠組みでは、lower P の $\emptyset$ 位置と *res* の $\emptyset$ 位置はそれぞれ独立した Primary Merge によって生成されるため、両者に同一の *root index* (例: $\sqrt{\text{IN}}$) の *occurrence* が挿入される。

派生は次のように進む。(i) 同一 *root identity* の複数の *occurrence* が、lower P と *res* を構成する機能要素にそれぞれ直接 EM される。(ii) 各 *occurrence* は素性を持たないため投射せず (Chomsky 2013)、各機能領域の最下層に留まり、その局所的環境に応じて、lower P では空間的スケール、*res* では結果性の解釈を独立に受ける。(iii) インターフェイスへの写像において、FC が両 *occurrence* を同一連鎖として同定する。(iv) PF では Chain Reduction (Nunes 2004) および Late Insertion により、この連鎖は単一の exponent ($/m/$) として実現される。

この分析では、*narrow syntax* の段階で両位置に統語的実体が存在するため要求 A・B がともに満たされる。また、述語関係はすべて EM によって構築されるため DoS と整合し、また各位置で解釈が局所的に決定されるため Late Insertion と整合する。

4. 経験的核心: 語順交替の PF 派生

本提案の経験的核心は語順交替にある。不変化詞が *narrow syntax* において *res* (上位) と lower P (下位) の 2 箇所が存在するなら、PF における *particle* の発音位置の選択がそのまま語順に反映されると予測される。*res* 側を

音形化すれば *particle-first* 語順 (*put down the book*) が, *lower P* 側を音形化すれば *object-first* 語順 (*put the book down*) が得られる。

さらに, 本分析は, 語順差が解釈差と相関することを予測する。 *object-first* では DP が *res* とより直接に関わる位置で解釈されるため完遂解釈が強く, *particle-first* では DP が *Figure* の位置に留まり経路上の移動体として解釈されるため, 完遂解釈は相対的に弱いと予測される。この予測は Bolinger (1977: 17) の観察と一致する。すなわち, #*They hauled the lines in, but didn't get them in.* では完遂の含意を後続節でキャンセルすることが困難である一方, *They hauled in the lines, but didn't get them in.* は容認される。

本分析はさらに独立に検証可能な予測を生む。 Culicover (1999: 94-95) によれば, *right* の修飾可能性は前置詞という統語範疇によってではなく, 空間・時間的スケールの終点が特定されているかという意味的条件によって決まる。 *lower P* が *Path/Place* に関わるスケール構造を担う以上, *right* は *lower P* 側が音形化される語順, すなわち *object-first* とのみ共起すると予測される。事実はこの予測の通りである (*We threw the rat right out.* / **We threw right out the rat.*)。このように, *object-first* / *particle-first* の対立は, 別個の基底構造の対立としてではなく, *particle* の発音位置の差を中心とする PF 側の選択として捉えることができる。この見方に立てば, 完遂解釈の非対称性, *right* の分布は, いずれも同じ分析の帰結として位置づけられる。

5. Aarts の段階性の構造的再解釈に向けて

最後に, Aarts の記述において, 前置詞・不変化詞それぞれの典型的メンバー (*on, in, over / up, off, out*) ほど両カテゴリーの性質が収斂する領域に位置するという逆説的事実に対し, 構造的説明の素描を与える。本発表は *lower P* 適格性条件を提案する。すなわち, 語根 $\sqrt{X}$ が *lower P* の位置に EM され VPC の *particle* として機能するためには, $\sqrt{X}$ は *Ground* (名詞補部) に依存することなく, 独立してスケール構造を派生に導入できなければならない。ここで $\sqrt{X}$ がスケール構造を導入できることは, 語根が形式素性や意味素性を持つことを意味しない。それは, 当該 *root index* が *lower P* という構造環境において解釈可能な百科事典的内容 (空間図式) と結びつきうるか否かという解釈部門レベルの条件であり, 語根の *contentlessness* (Panagiotidis 2020) と矛盾しない。 *during* 等の *Pure P* が表す時間的区間は名詞補部によって初めて確定するため (**during* $\emptyset$; cf. *The cat came in.*) , この条件を満たさず VPC を形成できない。対して *in, on, over* 等は容器性・接触性等の空間図式と結びつくため条件を満たし, かつ *Ground* 補部の選択も可能である。前置詞として最も典型的な空間的要素が最も強い両用性を示すのは, 典型性と両用性が同一の基盤—空間図式との結びつき—から生じるからだと考えられる。この限りで, Aarts の段階性は離散的な統語計算の *epiphenomenon* として捉え直されうる。Aarts の貢献は説明されるべき分布的パターン (*explanandum*) の体系的特定にあり, 本発表はその説明項 (*explanans*) を語彙的曖昧さから構造的条件へと置き換える試みである。

* 本研究は JSPS 科研費基盤研究(C) (課題番号 24K03968) の助成を受けている。本稿は第 98 回大会 (2026 年 5 月 16 日, 同志社大学) における研究発表に基づく。

参考文献

- Aarts, Bas (2007) *Syntactic Gradience: The Nature of Grammatical Indeterminacy*. Oxford UP.
Bolinger, Dwight (1977) *Meaning and Form*. Longman.
Chomsky, Noam (2021) "Minimalism: Where Are We Now, and Where Can We Hope to Go," *Gengo Kenkyu*, vol. 160, pp. 1-41.
Chomsky, Noam, et al (2023) *Merge and the Strong Minimalist Thesis*. Cambridge UP.
Culicover, Peter (1999) *Syntactic Nuts: Hard Cases, Syntactic Theory, and Language Acquisition*. Oxford UP.
De Belder, Marijke, and Jeroen van Craenenbroeck (2015) "How to Merge a Root," *Linguistic Inquiry*, vol. 46, no. 4, pp. 625-55.
Nunes, Jairo (2004) *Linearization of Chains and Sideward Movement*. MIT Press.
Panagiotidis, Phoevos (2020) "On the Nature of Roots: Content, Form, Identification," *Evolutionary Linguistic Theory*, vol. 2, no. 1, pp. 56-83.
Ramchand, Gillian (2008) *Verb Meaning and the Lexicon: A First-Phase Syntax*. Cambridge UP.
Svenonius, Peter (2003) "Limits on P: Filling in Holes vs. Falling in Holes," *Nordlyd*, vol. 31, pp. 431-45.
Svenonius, Peter (2010) "Spatial P in English," *Mapping Spatial PPs*, edited by Guglielmo Cinque and Luigi Rizzi, Oxford UP, pp. 127-60.